

四天王寺の慶長再建について

《キーワード》 荒陵山、豊臣秀吉、豊臣秀頼、寺社再興

木村 展子

はじめに

荒陵山四天王寺は聖徳太子の創建になる、日本有数の歴史を誇る寺院である。『日本書紀』には推古天皇元年（五九三）に創建されたと記され、伽藍の発掘調査でも飛鳥時代の瓦が寺域全体から多数出土していることから、飛鳥時代の早い時期に創建されていたことは間違いない。しかし、度重なる災害や戦乱により幾度も堂塔伽藍は灰燼に帰した。その都度復興されたものの、その造営の内容や経緯に関しては未だ不明なことも多い。本稿では特に近世初期、豊臣秀吉・秀頼によって再建され、慶長五年（一六〇〇）に落慶供養が行われた伽藍について考察したい。残念ながら慶長再建時の遺構は現存しておらず、造営文書の類もほとんど残っていないが、わずかなではあるが遺品や古文書類、さらには境内の発掘調査結果を手掛かりに少しでもその概要を明らかにしたい。

一．四天王寺造営の歴史

四天王寺の歴史は罹災の歴史と言っても過言ではない。それほど幾度も焼亡・倒壊と再建を繰り返してきたのであるが、特筆すべきは寺域がほとんど変動せず、なおかつ建築のほとんどが同一の場所に再建されてきたことである。それゆえ、造営の歴史をたどることは慶長期の伽藍を考える上でも重要である。

創建が飛鳥時代であることは前述したが、寺観が整うのは奈良時代前期までまたなければならぬ。五重塔・金堂・中門は創建時に完成していたと考えられるが、講堂と回廊の建立は奈良時代まで下ることが発掘された瓦より判明している。

その創建伽藍は、平安時代の承和三年（八三六）に雷のために塔が破損し、天徳四年（九八〇）には火災によって全焼している。これが文献上で判明している最初の大規模な罹災である。しかし間もなく撰閥家などの援助のもと復興され、その後も、四天王寺別当に

なつた覚猷や鳥羽上皇、後白河法皇などによって伽藍はさらに整備されていく。この時期に創建された堂宇も多く、念仏堂、五智光院などが造営される。十二世紀後期における四天王寺の伽藍の様子は、九条兼実の『玉葉』文治三年（一一八七）八月二三日の条に載る四天王寺指図と当日の記述によりある程度判明する。³⁾

中世に入ると、まず十二世紀中ごろに倒壊したままであった絵堂が、貞応三年（一二二四）別当である慈円によって再建される。⁴⁾ 十三世紀末には忍性によって真言院（現在の勝鬘院）が創建され、西門の鳥居が木造から石造に改められる。⁵⁾ しかし、康安元年（一三六〇）には地震のため金堂が倒壊、⁶⁾ 嘉吉三年（一四四三）には太子殿・御影堂・回廊・三昧堂・鎮守社などが焼失、⁷⁾ さらに応仁・文明の乱では大内氏の軍勢によって放火されている。⁸⁾

近世に入り、天正四年（一五七六）に石山本願寺と織田信長が戦った石山合戦の際に伽藍が焼亡する。⁹⁾ その後、豊臣秀吉・秀頼の二代にわたって再建されるが、それも再び慶長十九年（一六一四）の大坂冬の陣で灰燼に帰す。¹⁰⁾ やがて徳川秀忠によって元和九年（一六二二）に伽藍全体が再建されるが、¹¹⁾ 享和元年（一八〇一）に落雷のため五重塔、金堂をはじめ主要な堂宇を失ってしまう。この時は大坂白銀町の町人淡路屋太郎兵衛が中心となって広く勧進し、文化十年（一八一三）に竣工した。¹²⁾

近代になり、明治政府の推し進めた廃仏毀釈のため寺勢は衰退を余儀なくされるものの、文化再建の諸建築は命脈を保ち、その姿はわずかに残る当時の写真によりうかがうことができる。ところが昭和九年（一九三四）、近畿を襲った室戸台風によって五重塔と中門

が倒壊し、金堂は大破する。ただちに再建に取り掛かり、昭和十五年（一九四〇）までに五重塔・中門・東西回廊の落慶供養が行われたが、¹³⁾ それもすべて昭和二十年（一九四五）の大坂大空襲によって金堂・講堂・太子堂などと共に焼失してしまう。

戦後、大がかりな復興事業が始まる。昭和二十五年（一九五〇）より始まった第一期事業では太子殿・英霊堂・北鐘堂・南鐘堂・東西薬舎など、続く昭和三十一年（一九五六）よりはじまった第二期事業では中心伽藍、すなわち五重塔・金堂・講堂・中門・東西回廊などが再建され、第三期事業ではすでに再建されていた太子殿を除く聖霊院全体の復興が行われた。いずれの復興事業の際にも前段階に発掘調査が行われ、大きな成果を上げている。

二、天正の焼亡と豊臣秀吉の再建着手

天正四年（一五七六）五月、織田信長は石山本願寺と戦った際、四天王寺の伽藍に放火し、その上寺領を没収した。吉田神社の神主、吉田兼見の日記である『兼見卿記』によると、五月四日に信長勢は天王寺にて顕如ら本願寺勢と戦い敗れるが、翌五日に信長が出陣し、七日には本願寺勢を撃破する。このとき二千余りの兵が捕縛されたという。四天王寺側の史料である『天王寺誌』¹⁾には「織田信長放火伽藍、闕所寺領」、「秋野家譜」には「織田信長公放火于伽藍、没収寺領」と信長方の放火であると記すが、醍醐寺三宝院の義演の日記である『義演准后日記』慶長四年十一月十五日の条には「前年一向衆信長卿度々及合戦、于時為一向衆不残一字焼払了」と記され、本

